早稲田大学図書館所蔵

古活字玉屋謡本について

竹本幹夫

はじめに

二〇一五年一一月に古書肆青裳堂書店の『古書目録』に掲載された、観世謡本（古活字版　慶長末頃刊　素紙刷袋綴本　九十冊）は、孤本とされていた「古活字玉屋本」（天理図書館蔵）と呼ばれる、観世流古版本百冊の残欠本である。右目録刊行後に追加として二本が加えられたが、その内の〈杜若〉は整版の別本であり、玉屋本系の本ではない。目録発表後速やかに完売して、諸方に分散所蔵されるに至ったが、本学図書館にもその内の三十九冊分の玉屋本が入庫した。内、十二冊は竹本が科学研究費によって購入したものであり、当該研究の終了後に図書館に寄贈したために、現状では右の構成となった。この「観世謡本九十二冊」の本学所蔵本を含めた全体については、現蔵者不明分十八冊を除き、伊海孝充氏「玉屋謡本の研究（三）―新出の古活字玉屋謡本伝本の紹介―」（『能楽研究』41号、法政大学能楽研究所、二〇一七年三月）に概要の紹介がある。さらに最近、落合博志氏「江戸時代初期出版史の中の謡本の出版―古活字玉屋謡本の表紙裏文書を通して―」（法政大学能楽研究所「能楽の国際・学際的研究拠点」研究集会「能楽資料研究の可能性」二〇一八年一〇月二一日）により、早大本を含む主要伝本中の表紙裏文書についての報告が行われた。また天理図書館蔵の古活字玉屋本について

『早稲田大学図書館紀要』第六十六号（二〇一九年三月）

は、川瀬一馬博士の『日本書誌学之研究』に紹介され、該本も含む玉屋本全体については、表章博士の『鴻山文庫本の研究』に詳しい。本稿では、右の諸説を適宜参照しつつ、本学所蔵の三十九冊を中心に紹介し、玉屋本の性格についても若干の考察を加えたい。なお本稿は、平成二四～二七年度科学研究費基盤研究B竹本「江戸期以前の番外謡曲本文校訂に関する基礎的研究」（課題番号２４３２００５３）の成果の一部である。

一　早大本について

本学所蔵本の三十九冊の全曲目を左に記す。*印は竹本寄贈（科研費購入）分である。題簽が剥落して判読出来ないものは、天理本によって補い、曲名を（　）で囲んである。

あふひのうへ・あさかほ・あたちか原*・海士（あま*）・うかひ*・うねめ*・梅かえ・老松・をはすて・柏崎・春日龍神・鞍馬てんく*・（皇帝）・実盛・志賀*・俊寛・鐘馗・誓願寺・関寺小町*・殺生石・卒都婆小町・大会・当麻・てんこ・東岸居士*・道成寺・朝長・にしき木・軒端の梅・百万・松風（後人補記）（松風村雨）・三井寺*・紅葉かり*・やたてかも・山うは・夕かほ・養老*・吉野静*・籠太鼓

これらは他の五十二冊と同装・同料紙で、おおむね二四〇×一七八㎜の栗皮表紙。表紙左肩に鳥の子縦長刷題簽を貼る。袋綴本。古活字本。同一欠損活字の反復使用が多数認められる（以下では一々断らないことが多い）。料紙は楮紙。内題はなく、片面七行の近衛流書体。観世流節付で直しはない。奥付等もない。料紙の最末に「林氏」と朱書する例があり、また本屋によるものか後人のものか不明確ながら、不鮮明活字に墨筆で上書きする例がある。後人が詳細な節付直しを朱墨両様で加えた冊も若干ある。原節付には直しはないものの、役名・小段名・文字化された節付（イロなど）は比較的詳細である。「入」は用いず、対応する節を長めの上げゴマによって表現する点に特色がある。なお

全体に虫損がある。さらに注意すべきは、右本学所蔵本の傍線を付した諸曲の表紙裏打ちの料紙に反故が用いられ、年号を含む文字が存在することである（他氏所蔵本の中にも類例あり）。表紙・題簽ともに原装と信じられるので、この反故は販売に先立つ製本段階で、表紙の芯として封入されたものであることが確実視される。なお天理本は能楽研究所の所蔵写真による照合のため、表紙裏張りの類いは未確認である。表紙を解体しない限りは存否は不明である。

同版本たる天理本と比較すると、おおむね天理本の方が刷りの状態が良いが、中には逆に早大本の方が刷りの状態の良い場合もあり、実見し得た法政大学能楽研究所本でもほぼ同様であるので、恐らく両本は同時期の製本であり、料紙が刷られた順とは無関係に各冊が組み合わされているのであろう。天理本が百番であり、早大本を含む新出本もそれと重複する九十一番である。元々は新出本も百番の揃い本であったろう。以下、本学所蔵本三十九冊の各冊ごとに、天理本との比較結果を記し、裏打ちに用いられた反故は判読できる範囲内で翻字を試みる。入庫段階で、一度綴じ糸が外され裏打ちをある程度読める形になっていたが（表紙に完全に貼り付いている部分まで解体されたわけではない）、その後すべてがバラバラにされて撮影が行われた。現在は再び綴じ直されているが、早稲田大学「古典籍総合データベース」で、前掲曲名表記により、その全体が閲覧可能である。天理本との比較に当たっては活字の欠損の共通例と認められる場合の他に、同じ位置のカスレ（印刷むら）についても対象とした。もちろん活字自体の同定はそれでは出来ないが、両本が同版であることの傍証となるためである。これらの指摘該当部分の連字体活字には傍線を引く。また比較対象文字については、同行中にある同配列の文字と区別するなどのために、その字母を示すこともある。紙幅の関係上、気付いた例すべてではなく、各丁で最初に現れる事例のみを掲げた（例外もある）ことをお断りする。

① 葵上（あふひのうへ）

題簽一部剥落「□ふひのうへ」とある。書き込みなし（以下、ない場合は無注記）。墨付き8丁。下記の諸点の欠損

やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ1行目「朱雀院」の「院」字、同4行目行頭「申され」の「れ」字（早大本の方が欠損が大きい）、2丁ウ2行目「我思ひ」の「我」字、3丁オ2行目「もやの妻戸」の「も」字、4丁オ1行目「御息所」の「御」字、5丁オ3行目行頭「なりうちの」の「な」字、6丁オ2行目「身となりて」の「那」字、7丁オ3行目行末「何くに」の「具」字、8丁オ2行目「降三世」の「世」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁ウ7行目「うきを語覧」の「語」字の言偏に補筆、3丁オ1行目、シテの出「何くそ。〈〉」のオドリ字の末尾が早大本はすべて欠損、天理本は最終画が一部残存する。4丁オ3行目「仙洞のもみち」の「能」字、7丁ウ6行目行末「なよ」の「な」字に補筆。

② 朝顔（あさかほ）

題簽一部剥落「□さかほ」とある。墨付き9丁。以下の傷や欠損が、天理本と早大本は共通する。

1丁オ4行目「なつかしく」の「具」字、2丁オ1行目「おもひ」の全体、同3行目「萩槿の」の「槿」「能」字。3丁オ5行目行頭「花」字、4丁オ3行目行頭「まし」の「ま」字、5丁オ4行目行頭「なる」の全体、6丁オ1行目「なんとをも」の「と」字、7丁オ4行目「さそらひ」の「羅」「ひ」字、8丁オ2行目「くはいさくを」の「具」「越」字。

以下は早大本のみの欠損もしくはカスレの例。

1丁ウ7行目「立より」の「より」を補筆、活字は陥没か。2丁オ7行目行頭「こと」の「こ」字はカスレか。4丁オ3行目「なる事も」の「なる」「事」、7丁オ5行目「せんほうの」の「農」字。一見早大本の欠損に見え

るような場合もあるが、いずれも刷りむらの類いであろう。

以下は天理本のみの欠損もしくはカスレの例。

1丁ウ4行目「上りて」の「上」、「あたり」の「たり」連結部がいずれも欠損、早大本も「たり」の同箇所にわずかな傷。同7行目行頭の句点が欠損。その他では、2丁オ2行目「まかき」の「ま」字、「草」字、同6行目「露」字、7行目「なふ〳〵」の「な」字のいずれも、天理本のみ傷あり。以下も同様。2丁ウ7行目「シテ下」の「シ」字、同行末「なは」の「な」字と「は」のマワシ節、4丁オ5行目「くれなゐ」の「れ」字、5丁ウ4行目「さつけ」の「遣」字、8丁オ6行目行頭の「しや」の「や」字、8丁ウ2行目「物を」の「物」字、同3行目「思へは」の「思へ」など。

右の例に基づく結論としては、本冊については、天理本よりは早大本の方が刷りの状態は良いと言える。

以下は早大本と天理本との比較的重要な相違点。

1丁オ1行目冒頭早大本「ワキ詞」を天理本は「シテ詞」と誤る。同行「本は都の」の「の」字が、早大本は「能」、天理本は「の」。1丁オ2行目「より」の「よ」字、両本で書体がわずかに異なる上に、早大本は「よ」字、天理本は「里」字が一部欠損。同3行目行頭の「。もとゆひ」の「。もと」字が別活字、「ひ」が別活字。同行「諸国を」が3字とも別活字。同行「候」「。」が別活字。同行行末「と」別活字。同4行目「故郷」の「故」字が別活字。同行「なつかしく候間」の「候」別活字か。同行「この秋」の「こ」「秋」が別書体で全体が別活字か。同5行目「都に」の「尓」字が別活字、「都」もあるいは別活字か。同「上り候」の「里」「候」が別活字。同「上哥身をかへて」の全体が別活字。同6行目ほぼ全体が別活字。同7行目「そと」が天理本は連字体の別活字。同行「きり」の「り」のクル節が別活字。同行「黒髪の」の「能」字が別活字。1丁ウ1行目「捨て」が「て」の

ゴマ点も含め別活字。同行「迷ハぬ法のみち」が天理本は「まよハぬ法の道」で、「ハぬ法」以外は、大半のゴマ点も含めすべて別活字。同2行目「本のさとりの名にしおふ」の「にし」以外は別活字、ゴマ点もいくつかは別活字。同3行目「ときくそたのもしき〳〵詞是はゝや」の内、「と」「そ」「た」「もし」「詞」「ゝ」「や」の各字が別活字、ゴマ点も「た」字の「ハル」など相違例あり。同4行目「みやこに」の「こ」「に」、「候。」、「あたりは一条」の「たり」以外は、すべて別活字。同5行目「大宮佛心寺と申御寺にて有けに候」の、「大宮佛」「と申御」「にて有」「候」のそれぞれが別活字。6行目「。あら笑止や俄に村雨の降来りて候」の内、「。あら」「に」「の」「て」「候」が別活字。同7行目「。是なる寺に立より雨をハらさはや」の内、「に立より」「をハらさはや」が別活字（一部の連字体の構成も異なる）。第4丁オ3行目「仏果」の「果」字を早大本は補筆か。同5行目行頭「も」字を早大本補筆。7丁オ6行目行末「ゆうし」の「宇」字を早大本補筆。7丁ウ6行目「是空なる」の「空」字、早大本は補筆、天理本は別活字か。8丁オ2行目行頭の節付「下」、早大本は補筆。同行「てうきん」の「て」字を早大本は補筆。

以上、本冊早大本の刷りの状態が天理本に先行する可能性のあること、天理本に一部独自の誤植のあること、そのほか第一・四・七・八丁に異植の部分が存在すること、により、天理本の「あさかほ」冊は印刷の途中で右4丁分の版面に活字の脱落が起こり、部分的に組み直さざるを得ず、その際に誤植も発生した可能性が大きい。

③ 安達原（あたちか原）

墨付き10丁。以下のカスレや欠損が、天理本と早大本は共通する。

1丁オ7行目行末「本」字、2丁オ3行目「わひ人」の「人」字、3丁オ4行目「我たにも」の「多」字、4丁オ4行目「見る目」の「見」字、5丁オ1行目「かゝる」の「か」字、6丁オ1行目「賀茂」の「賀」字、7丁

オ1行目行頭句点（句点の潰れ。他にも例あり）、8丁オ2行目行末「へき」の「遍」字（早大本補筆）、9丁ウ1行目「祈り」の「里」字、10丁オ2行目行頭句点（句点の潰れ）。

以下は早大本のみの欠損もしくはカスレの例。

1丁オ1行目「つゆけき」の「き」字を早大本補筆、1丁ウ5行目「陸奥の。」の句点が欠落、2丁ウ7行目行頭「邊」字を早大本補筆、3丁オ7行目「ましる」の「ま」字の欠損、4丁オ2行目「わさ」の「わ」字のカスレ、5丁ウ5行目行頭「けり」の連結部を早大本は補筆、7丁オ6行目行末「あるしの」の「能」字を早大本は補筆、8丁オ3行目行頭「かた」の連結部早大本のみ欠損、10丁オ3行目「立まきれ」の「ま」字を早大本は補筆。

以下は天理本のみの欠損もしくはカスレの例。

6丁オ行頭「上地」のカスレ。

なお、4丁ウ3行目「世わたるハさ」が、光悦本・元和卯月本は「わさ」。8丁オ5行目行末～行頭「閨のうち」が、光悦本諸本は「ねやのうち」、元和卯月本は「閨のうちを」となる。いずれも古活字玉屋本独自の表記・異文。

④ 海士（あま）

題簽剥落。曲名原表記は天理本題簽による。墨付き13丁。書入等はない（天理本は13丁オ5行目「経や」の下の空白に「な」と墨書）。以下の傷や欠損が、天理本と早大本は共通する。

1ウ4行目「きし」の「し」字、2丁オ4行目「一人」の「人」字と10丁ウ1行目「人」字、3オ1行目「草」字、6丁オ1行目「ひとり」の「ひ」字と10丁オ7行目「ならひ」の「ひ」字、12丁ウ3行目「此寺の」の「の」字など。

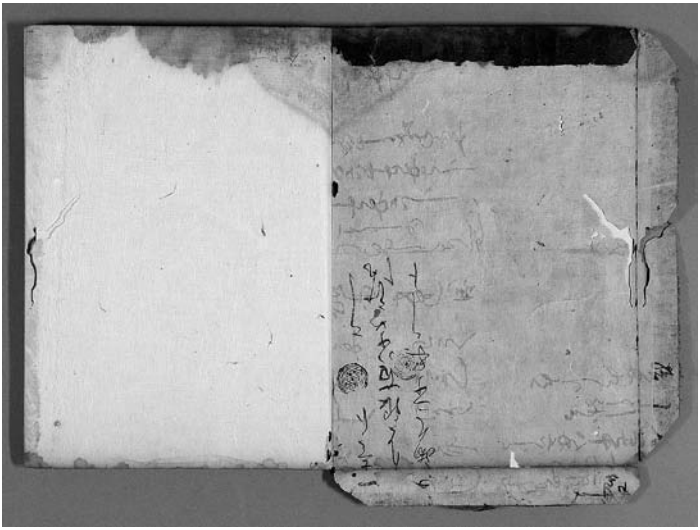
以下の諸点は天理本のみの傷もしくは欠損。

2丁オ3行目「着」字、2丁ウ7行目「あるに」の「尓」字のゴマ点、3丁オ1行目「花」字、5丁オ1行目「らしき」の「ら」字、同じく2行目「シテ」の「テ」字、8丁オ6行目「世つき」の「徒」字など。

早大本には表紙（二枚）と裏表紙（一枚）に封入された反故に左のごとくある。写真②はいずれも支出の明細らしく、「ひやうしちん」とあるのは、表紙を注文した控えか。「胡粉」「膠」「刷毛」「もみたし」があるのは、大半が印刷・製本の用材であろう。「もみたし」は「揉み出し」か。刷り具の一種であろうか。写真⑤は在庫の細目らしく、以下の反故でも類例が少なくない。詳細不明の書名の略称もあるが、漢籍のみならず、芸能に関わるような和書も扱っていることが判る。

（表紙裏の分）〈写真①（原状）〉 写真③に同じ

〈写真②第一段〉 ］此かね木文／ ］□十三匁／ ］□十七匁七分／］匁／ ］□（弐カ）百五十文此かね五匁／〆二百六十七匁七分／ ］三十七匁六分／ ］□うことしの／ ］□とりひやうしちん也／ ］□（九カ）拾匁 才運



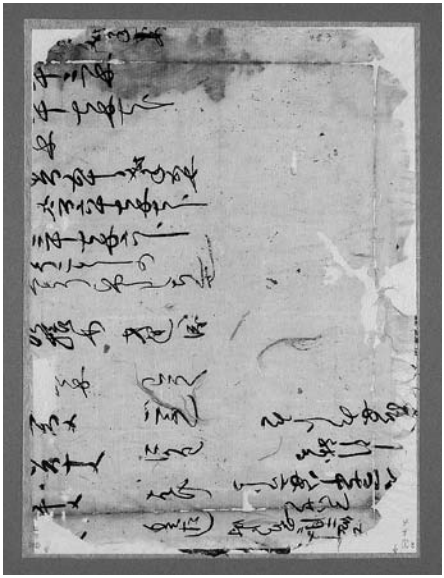
④海士：写真①

へ渡／　］□匁　わこく／　］□百メ(文)　ごふん／　］□百十メ(文)　にかわ／　］□十メ(文)　はけ／　］□　もミたし／〈同第二段〉］□□十文／但二月ニのほり申時／つかいせん／　］九百七十八匁六分か／　］□引残る／拾匁九分有／

〈写真③〉一　弐匁八分［　　］□□□／但□［　　］ともニすむ／一　壱分（黒丸印）たし／もと銀百八十めうけ取申候／残て二十匁（黒丸印）ニかし申候

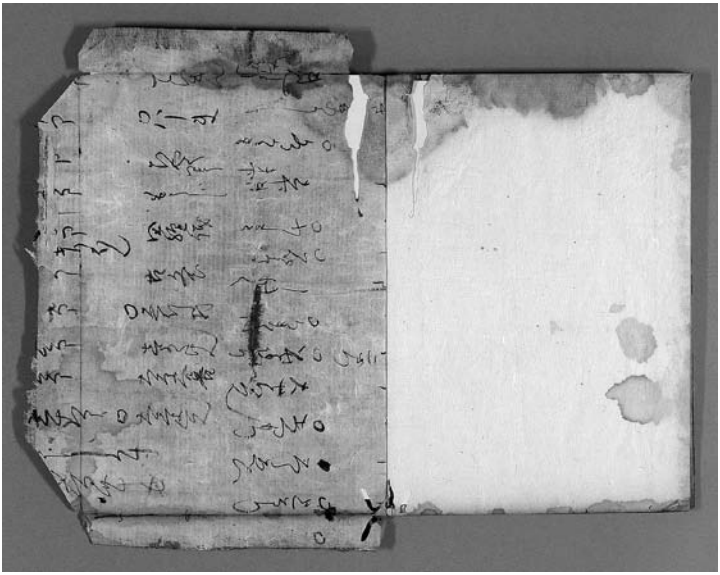
（裏表紙の分）〈写真④（原状）〉写真⑤に同じ

〈写真⑤第一段〉○／　］□部　○上なり／　］□／　］壱部　●ろうゑい／　］□部　○あつもり／　］壱

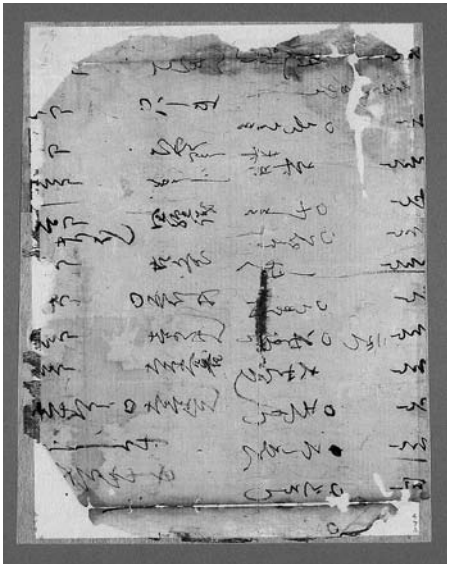


④海士：写真②

④海士：写真③

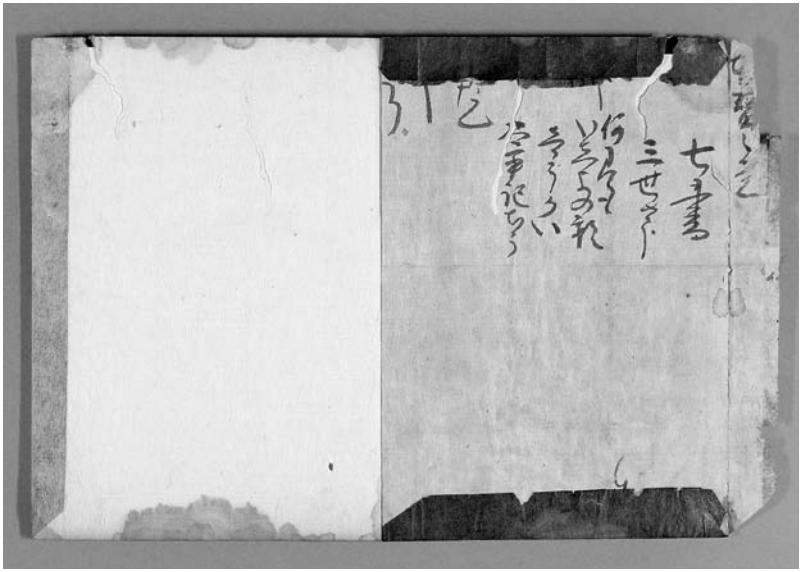


④海士：写真④



④海士：写真⑤

部　大せいくん／　］壱部二さつ　○いせものかたり／
］□部　○かまた／　］□□壱部　しきもく／　］壱
部　○花鳥／］五部　○にしきゝ／　］壱部　土やきき
やう／　］□部　○水かゝミ／ぬき□［　］□のよし／
］□部　きんしうたん〈同第二段〉］部　ていきん
／　］□部　○八しま／　］□部　ひやくりう／　］壱
部　もうじ／　］□／　］壱部　ありほん　四経議／　］



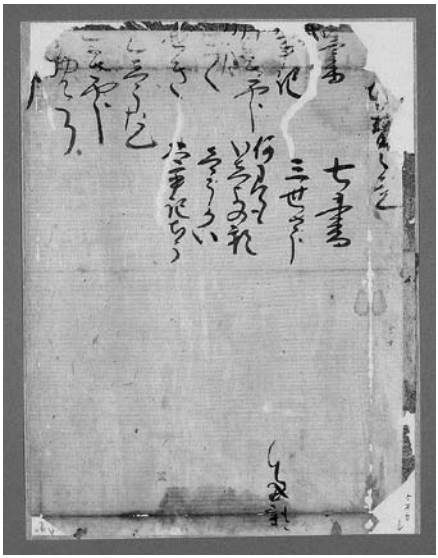
⑤鵜飼：写真①

□部　古文真／　」□部　○ゑほし折／　」壱部　しよくけん／　」壱部　大学合巻／　」三十八部　○大しよくハん／　」□申候了かけ　／　」〆百四十五

⑤ 鵜飼（うかひ）

墨付き10丁。以下の活字の傷や欠損例等で天理本と早大本が共通する。

2丁ウ2行目「をくゆ」の各字、4丁オ4行目「科



⑤鵜飼：写真②

の」の「の」字、5丁ウ2行目「あへり」の「里」字、6丁ウ6行目「ひら」の「ひ」字。

なお、2丁ウ4行目「いとなむ芸の」の「の」字は早大本に、5丁オ7行目「つかふ」の「つ」字は天理本に、活字の欠損らしきものが見えるが、いずれも印刷ムラによるカスレであろう。

表紙裏の反故に以下の文字が見える。「本替」は、本屋同士で在庫によって売り掛け金の精算を行うことをいう（落合博志氏御指摘による）。すなわちこの反故の書き手は、他書肆から預かった在庫品を複数保有するのみならず、自身が刊行した書籍を他店に預託していたことが推察される。

〈写真①（原状）〉写真②に同じ

〈写真②第一段（二段書きの可能性あり）〉本替之覚／□□書　七書／□事記　三世さほう／□きやう何にてもいしよの類／□□く　しゝうかい／□せき　太平記ちう／□んしうたん／□きやう／□□か物かたり／　［　］〈同第二段〉請とり

⑥采女（うねめ）

墨付き11丁。旧蔵者の間拍子書き込み少々あり。以下の例等で早大本と天理本の欠損部が共通する。

1丁オ4行目「候」字、2丁オ4行目「桜の」の「の」字、3丁ウ1行目「人」字、同じく3行目「去」字、6丁オ1行目「御門」の「門」字、7丁オ4行目と11丁ウ4行目の「おほ」字、8丁ウ7行目「つかへ人」の「徒」字など。

11丁ウ3行目「遊楽」の「楽」字、天理本は「閑」と誤植するのを早大本は「楽」と訂している。これは当該丁は天理本が早大本に先行していたことを示す。恐らくは製本以前の印刷中に、発見された誤植の校正を行うこともあったのであろう。

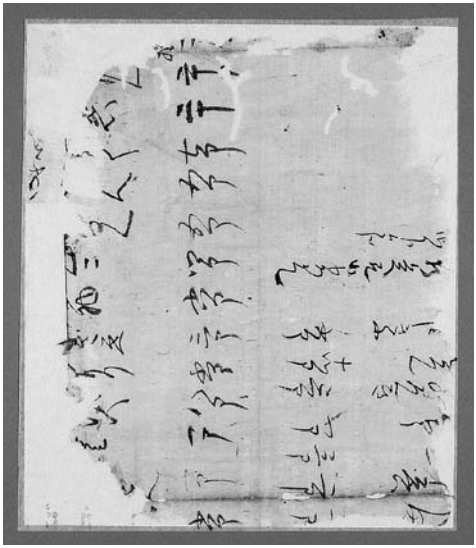
なお裏表紙に糊付け封入された裏打ちの反故二枚に次のように文字がある。写真②の「過上」は精算の残額分であり、貸し越しになるのか借り越しになるのかは不明ながら、やはり本替の際のものであろう。最末の「通済」は融通決済のことであろうか。不明。「曽我物語」などと共に、「六韜」のような漢籍、「四教義」のような仏書の名も見える。

（一枚目上部断片〈写真①〉）

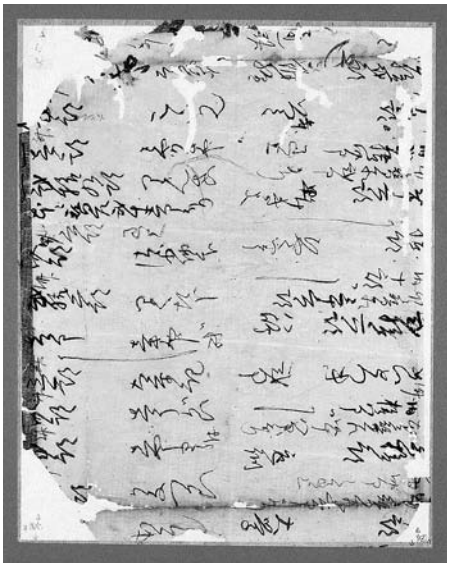
］手聞有［

（一枚目第一段（上部欠損）〈同〉）

］物　□□部／］もん　二十部／　］□ゑ　二十／　］□□く　七部／　］□□ん　五部／　］



⑥采女：写真①



⑥采女：写真②

□□ん　五部／　］んこ　四部／　］□物　六部／　］きゑ　三部／　］□もり　六部／　］□人
八部／　］せミ　一部／　］はん　一部／　］六部

（一枚目第二段（上部欠損）〈写真①〉）

］□ま　一部／　］□ゑい　二部／　］□　三部／　］んちう　一部／　］□のろんき　三部／
をくん　十弐部／　］ミしきふ　六部／　料足にて弐十□にて／御下候分

（二枚目第一段）〈写真②〉

□□□□／　］□□□なし□／　］□□　そか物語／　］弐部　こゝ□み／一　壱済部　しやつきやう／
一　弐拾九部　りんさい／本ニ替合弐十三部なり／　四□六部　過上／一　四済部　清少納言／　］弐拾
二部　りくたう／　］壱部　しきやうぎ／　かし／　］三済部　太平記／一　四済部　さうがい／　］弐済
部　しやうりう付／　］□済部　かなつかひ／　］　直ハん

（二枚目第二段）〈同〉

］□部　大学／　］□此本ニ替所六部なり／　］□□　四部之過上／　］六拾部　庭訓／　本ニ替所四
十八部なり／内拾八部ハ　かし／　］めいとつき済　弐部／　］弐拾六部　八嶋／　］本ニ替合三十六部／
内十部ハ　かし／　］拾部　ひやくりう／　かし／　］弐拾六部　かけきよ／　］本ニ替所弐部なり
／　］内弐拾四部　過上／　］□／　］□四部　いつミ舞／　］□拾弐部　雛経／　］□　通済

⑦ 梅枝（梅かえ）

墨付き9丁。なお天理本は最終丁が落丁。以下の例で早大本と天理本の欠損部等が共通する。

1丁オ1行目「世の中」の「の」字、2丁ウ2行目「去」字、3丁オ4行目「何事」の次「にて」の前に込め物

（スペース）の痕跡（早大本はかすか）、5丁ウ7行目「うたかひ」の「ひ」字と7丁オ6行目「ゆひかひ」の上の「ひ」字、8丁ウ7行目「えたに」の「たに」字。

なお、早大本のみの欠損例が以下の通りに存在する。この冊は天理本の方が刷りが先行するのであろう。

5丁オ2行目「太鼓」の「太」字、6丁オ1行目「あるひ」の「る」字、同4行目「たのもしや」の「や」字、6丁ウ7行目「すかた」の「かた」字。

⑧ 老松

墨付き7丁。以下の例で早大本と天理本の欠損部等が共通する。

3丁ウ6行目「若木の」の「の」字、4丁オ1行目「ふるひ」の「ひ」字（前出『海士』10丁オ7とは別活字）、同じく2行目「さひし」の「ひ」字、6丁ウ4行目「をも」の「を」字、7丁ウ1行目「シテ下若の」の「の」字。早大本のみの欠損例が以下の通りに存在する。

2丁ウ7行目「にて候そ」の「そ」字、3オ7行目「松をは」の「を」字。

逆に天理本のみに見える欠損の存疑部分もある。同丁なのに双方に別々の欠損が存在するということはあり得ないので、天理本の左の例は刷りむらであろう。

3丁ウ4行目「上カ丶ル」の「上」字。

⑨ 姨捨（をはすて）

題簽下部欠損。天理本で補う。墨付き10丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本と天理本とは共通する。

1丁ウ6行目「の」字、同じく7行目「おもひ」の「おも」字、2丁オ2行目・4丁ウ1行目「人」字（両者は別字か）、2丁ウ5行目行頭の「と」字、その下の「問せ」の「せ」字、3丁ウ2行目「上哥同」の「上」字、

6丁ウ6行目「身を」の「を」字、7丁ウ5行目「去」字など。

なお、早大本には次のような欠損もしくはカスレの例がある。本曲天理本にはカスレの例はほとんどない。本冊も天理本の方が刷りの状態がよく、先刷りなのであろう。同版の印刷中に頻繁に活字の欠損が生じるのは、古活字版では従来考えられていたよりも大部数を印刷していたのであろう。

2丁オ1行目「山路」の「路」（このカスレに補筆を行う。その他は書き込みなし）。7丁オ4行目「けう」の「け」字、7丁ウ3行目「あま」の「ま」、同5行目「下クセ」の「下」字、8丁オ1行目「みちひき。」の句点など。

⑩ 柏崎

墨付き14丁。書き込み等はなし。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本と天理本とは共通する。

2丁オ7行目「候」字、3丁オ2行目「を」字、5丁オ4行目「様々の」の「の」字、7丁オ6行目「と」字、8丁オ4行目「人」字、9丁ウ5行目「をも」の「を」字、10丁ウ5行目「風」字、11丁オ5行目「ならひ」の「ひ」字、12丁オ2行目「の」字など。4丁オ3行目「三年」の「三」、同4行目「われも」の「も」字は早大本の独自の欠損か。

⑪ 春日龍神

墨付き9丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。本冊も天理本の方が刷りの状態が良く、先刷であることが判る。

4丁オ1行目「人」字の欠損、6丁ウ6行目「天」字の欠損、8丁ウ1行目「や」字の欠損、9丁オ1行目「わたる」の「わ」「る」字の欠損を、早大本は独自に補筆する。

後記の諸点の欠損やカスレ等（両様の厳密な判別不能）でも早大本と天理本とはほぼ共通するものの、天理本の方が

刷りの状態のよい場合が多いようである。

5丁オ1行目「天台山」の「山」字（早大本の方が欠損が大きい）、6丁ウ4行目「給ふ」の「給」字、7丁オ5行目「うちより」の「よ」字（早大本の方が欠損が大きい）、8丁ウ4行目「三笠の」の「の」字など。

⑫ 鞍馬天狗（鞍馬てんく）

墨付き11丁。本文への補筆少々。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

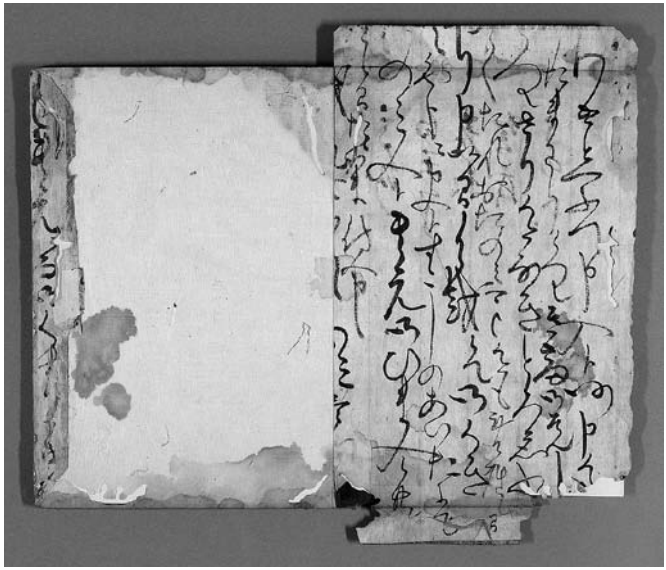
1丁オ4行目「梢をも」の「を」字、2丁ウ5行目「外人」の「人」字、ただし早大本は補筆、3丁ウ3行目「花の」の「の」字、4丁オ4行目「松もむかしの」の一句の役付「ウシ」とあるべき所が空白、5丁ウ2行目の「人」字、7丁オ2行目「飛て」の「て」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁オ4行目「いひし」の「ひ」字、3丁ウ4行目「一夜」の「夜」字、ただし早大本は「亠」を補筆。7丁オ2行目「ふむて」の「て」字第1画は早大本補筆、第2画末尾は早大本の欠損、7丁オ7行目「さこそ」の「そ」字、10丁ウ7行目「すゝかん」の「ゝ」字、同じく「まもるへし」の「へ」字、11丁オ3行目「合戦といふとも」の上の「と」字と「も」字、同じく「影身」の「身」字は早大本第1画を補筆。

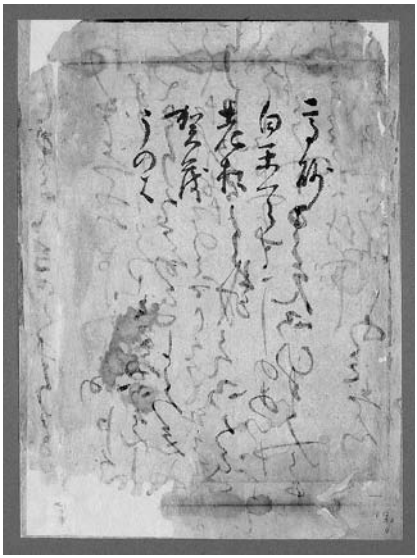
以上からやはり本冊も天理本が先刷と判断出来る。

なお表紙裏・同料紙の裏面の計一枚、裏表紙裏の反故一枚に以下の文字がある。写真④の「すいきやう人」「しほかわおしゆほうさま」は「推挙人」「塩川御主房（坊）様」か、なお存疑。久三郎と同様に勘右衛門の署名の下には花押があるらしく、この両名から提出された書類を与三右衛門尉が届けたものであろうか。塩川が宛先の姓なのであろう。写真①の書状はほとんど哀願に近い内容のようであるが、これと写真④の関連も不明である。写真②は五番



⑫鞍馬天狗：写真①

綴謡本の曲名であろうか。類例のない番組ながら、寛永年間にはすでに五番綴の版行謡本が出現していた。脇能のみ等の、同じ曲趣で一冊とするような番組は、寛永卯月本の覆刻本の末流の後刷り本にならないと出現しないようである。ただし伊藤正義氏旧蔵寛永十年三月吉日刊刊者不明観世流小本とその後刷り補刻本である演劇博物館安田文庫本（いずれも整版本）のように、曲ごとに独立した曲名版木を組み合わせて題簽に印刷し、それぞれ番



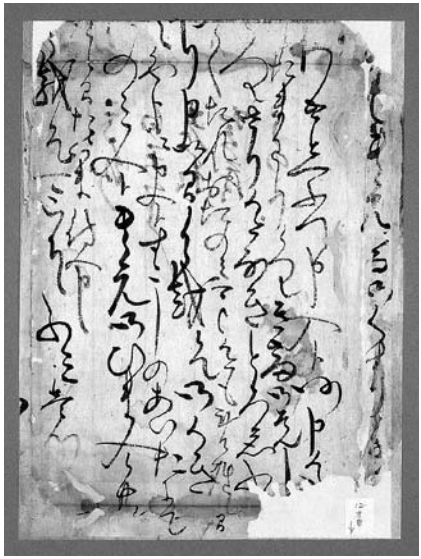
⑫鞍馬天狗：写真②

組を若干異にする二十冊百番謡本を発売したらしい例が存在することからは、一番綴の本を自由に組み合わせて五番綴とすることがあり得たであろう。この五曲は古版本はもとより、江戸初期までのすべての観世流百番本（内組本）に含まれる。

〈表紙裏の分〉〈写真①（原状）・写真③に同じで解読には③も参照〉

わさと一ふて申入候何申かた［　／　］したまわり候へく候ささま御そんし［　／　］□候へ共さりかたなきところゑ少□［　／　］て候たれおたのミ可申かたも無御座候間／　］やり申候間御越候て御かき／　］□かやうニ申入候すこしのあいたにて／　］たのミ入候其元御ひま入候共／　］□候間たゝいま伝へ申候／　］被越候て可被下候ふミ壱つ［　／　］□［

早稲田大学図書館所蔵　古活字玉屋謡本について



⑫鞍馬天狗：写真③

⑫鞍馬天狗：写真④

（右表紙見返しの折り返し部分に見える分）〈同〉 ］□し其元に而御くすりかき□［

（右料紙の裏の分）〈写真②〉高砂／白楽天／老松／賀茂／うのは

〈写真③〉（写真①に同じだが折り返し分が本来の位置である料紙冒頭に来る）

（裏表紙裏の分）〈写真④〉すいきやう人勘右衛門（花押）／同久三郎（花押）／使与三右衛門尉／しほかわおしゆほうさま　まいる

8丁オ4行目「雲となりて」の「なり」、元和卯月本やその前後の観世流古写謡本・後代の板本はおおむね「雲となつて」、光悦本系諸本のみは「成て」で、古活字玉屋本は光悦本系の本文に基づく恣意的校訂か。

⑬ 皇帝

題簽剥落。墨付き7丁。書き込み等なし。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁ウ1行目「おほろ」の「ほ」字、5丁オ2行目「なり」の「な」字、6丁オ3行目「あけ」の「け」字、6丁ウ1行目「なり」の「な」字、7丁オ5行目「出るを」の「を」字、7丁ウ2行目「きり」の「り」字。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレで、本冊については、同版ながら早大本が先行することを示す例。

1丁オ2行目「三千の」の「の」字、2丁ウ1行目「只今」の「今」字、7丁ウ1行目「つた〳〵に」の「に」字。

⑭ 実盛

墨付き13丁。後人の間拍子等の墨書書き込みあり。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

2丁オ4行目「老眼の」の「の」字、3丁ウ3行目「一つ」の「つ」字、5丁オ5行目「実盛の」の「の」字、8丁オ5行目行頭の「は」字、10丁オ3行目「おとなけなし」の「と」字、11丁オ2行目「錦の」の「の」字、

12丁オ3行目「あけ」の「け」字、13丁オ2行目「をしつけて」の「つ」字、同じく5行目「あけて」の「け」字（前丁とも同活字）。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレで、同版ながら早大本が先行することを示す例。

1丁ウ5行目「そや」の「そ」「や」字、6丁オ3行目「池の邉」の「邉」字。

以下は早大本独自のカスレの例。

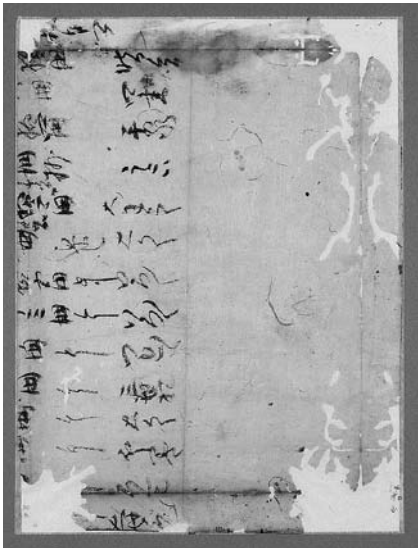
6丁オ1行目「恥」字、同じく7行目「わたる」の「わ」「た」字、9丁ウ6行目「あな」の「な」字。

同丁なのに両本で相互に別のカスレがあるのは、刷りむらの結果である。

9丁オ3行目「御前に参り」は、光悦本「御まへに参り」、元和卯月本は「御前に参りて」。ここも光悦本の影響下に恣意的な文字遣いをしている例。

なお、表紙裏に封入された反故一枚に以下の文字が見える。これも本替に際しての在庫の明細であろう。「うたい」の上部に「揃」の文字が見える。百番などの揃い本の在庫であろうか。その他の場合は全一冊分の在庫ということになろう。「とし」は「とぢ」で複数冊編成か。

〈写真①〉九月四□／　］拾冊　昨日今日／　］
□冊　四書／　］拾四冊　平家／　］冊揃
うたい／　］月十五日／　］拾四冊　大わこく／
］月廿五日／　］冊　ひやうし　大かく／　］



⑭実盛：写真①

拾五冊としいろ〳〵／　］十三冊としいろ〳〵／
］□冊とし　つれ〳〵／　］□冊とし　三世相
／　］冊とし　大かく／　］冊　とし　ほうりや
く／　］□［　］し　ろんこ／　］し　大せくは
ん

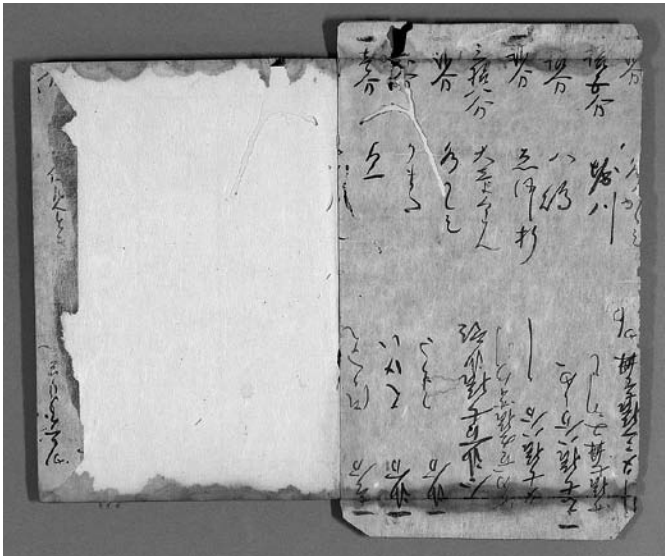
⑮ **志賀**

墨付き9丁。裏表紙見返し左下隅に「林氏」と朱書。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ7行目「これ」の「れ」字、2丁オ3行目「立へたて」の「へ」字、3丁ウ7行目「哉らん」の「ん」字、4丁オ2行目「おもひ」の「ひ」字、5丁オ6行目の「埋木の」の「の」字、8丁オ2行目「志賀」の「賀」字。

以下は早大本のみのカスレか欠損の例。

7丁ウ3行目「なけの」の「の」字、同じく「花のかけ」の「か」字（いずれも天理本にも欠損の傾向があるがより小規模）、8丁オ3行目「見えて」の「て」



⑮志賀：写真①

字（刷りむらであろう）など。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁オ2行目「山」字、5丁オ5行目「哥人」の「人」字、7丁オ2行目「とは」の「は」字、8丁ウ6行目「なり」の「な」字。

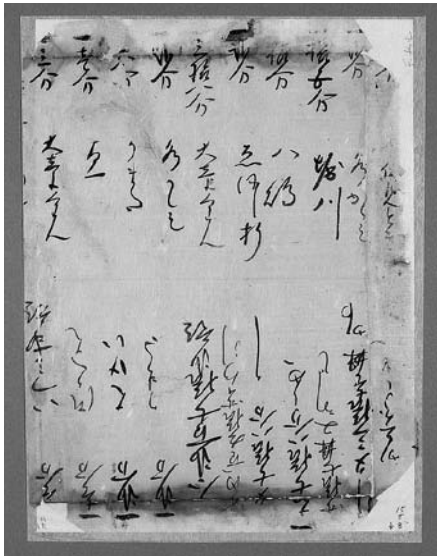
右の7丁目・8丁目の相互の異なる欠損部は、いずれも同活字であり、一方がより程度が甚だしいという相違。刷りの具合で欠損の目立ち方が相違するのであろうか。7丁目については天理本が先印、8丁目については早大本が先印のようである。

なお表紙裏に封入の反故一枚の半折両段に以下の文字が見える。これも本替の計算書であろう。『水鏡』の他は幸若舞の本が中心。

〈写真①〉（②と同じ料紙の原状撮影）

〈写真②〉（半折第一段）」分　伏見とき□／一　弐分　水かゝミ／一　拾五分　堀川／一　拾分　八嶋／一　弐分　ゑほし折／一　三拾八分　大しよくわん／一　弐分　水かゝミ／□　六分　かまた／一　壱分　与一／一　三分　大しよくわん／［　　］**（一行分判読不能）**

（半折第二段）□壱分　いつミ式部／一　壱分　つくは／一　弐分　はけい／一　弐分　かまた／合弐百七拾弐部／此内へ百九拾四さつ引／〆　七拾八分　かし／一　右七拾八分之内へ／四拾七冊又なし申候



⑮志賀：写真②

／〕引〆三拾壱冊かり／かゝへ分之覚／□（以下判読不能）（「かゝへ分之覚」は写真①を参照した。第一段の第1行と第2段の「かゝへ分之覚」以下は、写真①では表紙見返しに貼り付けられていた本紙から離れて表紙裏に貼り付いていたが、本来は同じ料紙の一部で、写真②では正しい位置に補修されている。）

⑯ **俊寛**

墨付き10丁。早大本は本文への上書き補筆若干あり。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

3丁ウ2行目「候へ共」の「へ」字、4丁オ5行目「来るをも」の「を」字、4丁ウ1行目「ときは」の「と」字、同じく4行目「のむさけは」の「ハ」字（早大本は補筆）、5丁オ4行目「有難や候」の「候」字、6丁オ5行目「三人」の「人」字、同じく「たに」の「に」字、7丁オ5行目「おもひ」の「お」「ひ」字、8丁オ2行目「有へき」の「へ」字、9丁ウ1行目「頓て」の連続部。

以下は早大本のみのカスレか欠損の例。

1丁オ7行目「急候」、2丁ウ7行目「雲母」の「母」字、5丁ウ7行目「此嶋」の「此」字。

本冊も天理本が先印であろう。

⑰ **鐘馗**

墨付き6丁。表紙裏の裏打ち反故に補助線入りの仏頭下絵あり。書き手は仏画も手がける業者であったか。なお本曲は元和卯月本未収曲。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ2行目「事の候」の「候」字、同じく4行目「をたち」の「を」字、3丁オ1行目「ひかり」の「ひ」字、5丁オ5行目「誓ひ」の「ひ」字。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁ウ3行目「とへ共」の「と」「共」字、6丁ウ2行目「にかゝやき」の「に」字。

本冊は早大本が先印である。

仏頭画の左端に文書断片の細片が見え、一連の記録の行頭部分らしき左の文字が確認出来る。これも在庫の日計表の類いの断片であろう。

〈写真①〉□［　弐［　／同日十六［　／同日弐□［
／間十□［　／十月□五拾［　／十一月五□［　／廿三日［　五拾［　／廿四日三十［　／同日四十［　／廿五日十八［　／同日十□／同日十冊／同日六冊／廿五十［

⑱誓願寺

墨付き11丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ2行目「ひろめん」の「ひ」字、2丁オ1行目「ついて」の「徒」字、3丁ウ7行目「人中」の「人」字、4丁オ7行目「人数」の「数」字、5丁オ2行目「さとりをも」の「を」字、6丁ウ1行目「上人」の「人」字、7丁オ1行目「住人」の「住」字、9丁ウ6行目「なり」の「な」字、10丁オ6行目「この」の「能」字、11丁オ2行目「あらた」の「た」字。

以下は天理本独自の欠損の例。

⑰鐘馗：写真①

6丁オ5行目「一体」の「一」のフリ節。

この他にも天理本にはカスレの例があり、版面の状態は早大本の方がやや良い（逆の例もある）。

⑲ 関寺小町

墨付き12丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ7行目「人達」の「人」字、2丁オ4行目「かく」の「か」字、3丁ウ3行目「候」字、4丁ウ3行目「庶人」の「人」字、5丁ウ2行目「衣通姫」の「通」字、6丁ウ1行目「へし」の「へ」字、7丁ウ4行目「人」字（4丁ウ3行目と同活字か）、8丁ウ5行目「の」字、10丁ウ2行目「上人」の「人」字（7丁ウ4行目と同活字か）、12丁ウ1行目「なり」の「な」字（⑱9丁ウ6行目と同活字）。

本冊は早大本と天理本で刷りの前後を見極めがたい。

⑳ 殺生石

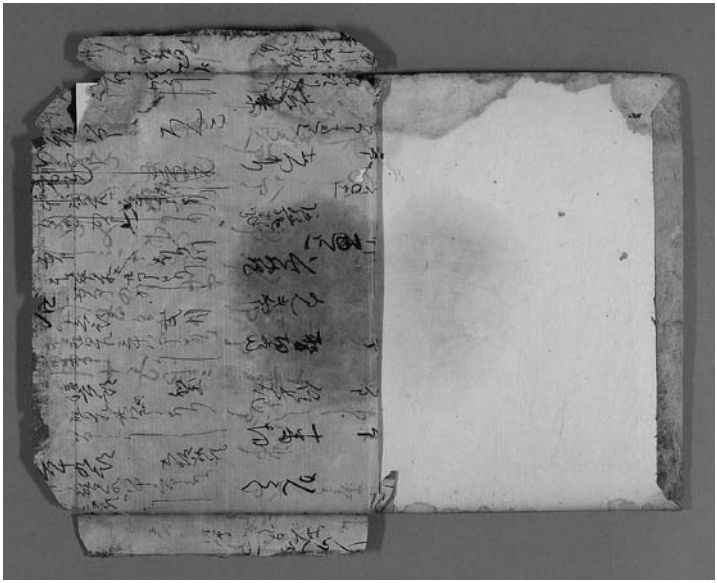
墨付き10丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ4行目「ひらき」の「ひ」字、2丁ウ1行目「人」字（⑲4丁ウ3行目と同活字か）、3丁ウ3行目「ときしも」の「し」字、4丁オ3行目「玉藻の」の「の」字、5丁ウ5行目「玉藻」の「藻」字、6丁ウ7行目「木石」の「石」字、7丁ウ3行目「今そ顕」の「顕」字、8丁オ5行目行頭「院」字、9丁オ1行目「かけり」の「り」字、10丁オ2行目行末「かたき御」の「御」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁オ2行目「畜類迄も」の「も」字、6丁ウ2行目「懺悔」の「悔」字。

両例ともに墨の乗りが悪くカスレたものであろう。欠けた部分に薄く筆勢が認められる。

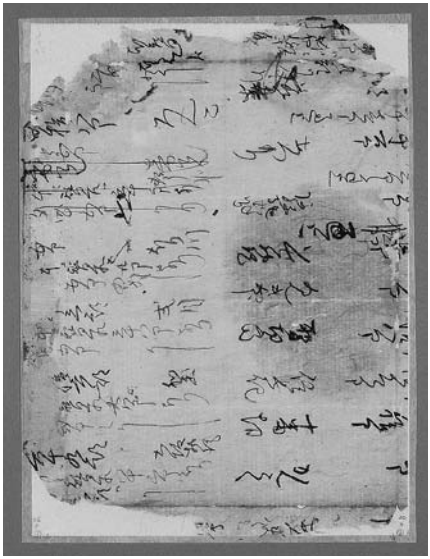


⑳殺生石：写真①

裏表紙に封入されたそれぞれ半折された二枚重ねの反故あり。いずれも本替の計算書。墨滅箇所がいくつかある。史書・字書・物語草紙類等に交じり、『大坂物語』が見えるのが注目される。一巻本か二巻本か、不明である。

〈写真①〉〈写真②の原状写真・一部を左で参照〉

〔一枚目第一段〈写真②〉〕部　あつまか、

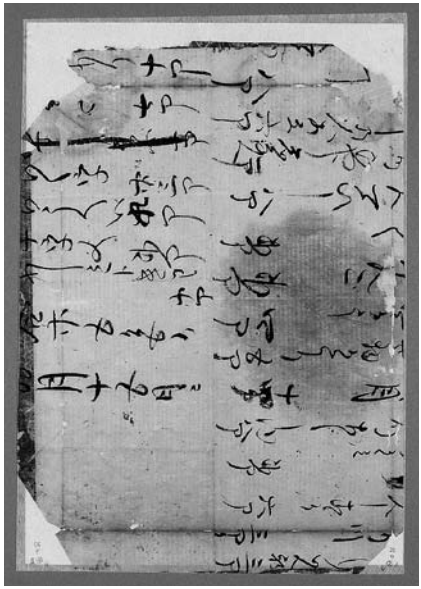


⑳殺生石：写真②

ミ／　］部　かんこく／　］□拾部　十番
切／　］拾壱部　信長記／　］拾八部　聖
劫斉／□／　］部　ゐんきやう／　］三部
　いせ物語／九分（十三部）過上／　］弐部　阿弥陀む
ねハり／　］三部之過上／　］□十六部　あ
つもり／　］□十壱部過上／　］□部　節用
集／　］□□部預リ分ニ引／　］□弐部ハ本ニ
替／　］しきやうき　後ニ／□□□か［

（第二段）〈写真同〉□／本替／　］三部
（右馬殿より）わたし／　］〆［　］□部　かし
／□□／四拾八部　ろんこ／　］拾五部／しゆてん――しゆてんたうじ／本ニ替所小六十部なり／〆四十五
部―かり／五部　ほり川／本ニ替所ハ廿部なり／五部のかし／　］□十三部　式目／本ニ替所三十八部な
り／内五部　かし／　］拾六部　和玉／　］替所廿八部なり／　］弐部之かし／六十九部　大坂物語／
　］本ニ替所八十二部なり／　］□□□□部ハ　かし／　］□人處

（二枚目第一段）〈写真③〉　］しノいんね三部／　］□り川　三部か／　］人しすか　六部／　］□／　］
□かゝミ　弐部／　］つこじしゅ　八部／　］目　十四部／　］せ物かたり　五部／　］四かう　四部
／　］ろんご　弐部／　］く　弐部／　］んてひし　八部／　］つひやうしなん　一部／　］し乃人あな
六部／　］□　八部／　］□しやうき　［



⑳殺生石：写真③

（第二段）〈写真同〉　］もり　十部／　］□□た　七部／　］四十三部□□ベ三部／　］らく字　廿三部／
］らうへい　九部／千字文　弐部／ふしミトきわ　十部／　］合廿五色か／九月十五日ニ

㉑ 卒都婆小町

墨付き11丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

2丁オ4行目「翡翠の」の「の」字、2丁ウ3行目「諸人」の「人」字、3丁オ1行目「うき」の「う」字、3丁ウ4行目「色性の」の「の」字、5丁ウ1行目「礼をは」の「を」字、6丁オ1行目「ほたひ本」の「本」字、7丁オ7行目「詩を作り」の「作」字、8丁オ4行目「あすのうへ」の「へ」字、9丁ウ5行目「おほき」の「ほ」字、10丁オ3行目「はかま」の「ま」字、11丁オ3行目「そや」の「や」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁オ4行目「翡翠」の「翠」字（本来の不鮮明字の一部を削って上書きしたか）、6丁オ2行目「なきとき」の「と」字、8丁ウ6行目「こひえぬ」の「ひ」「え」字。

本冊は天理本が先印であろう。

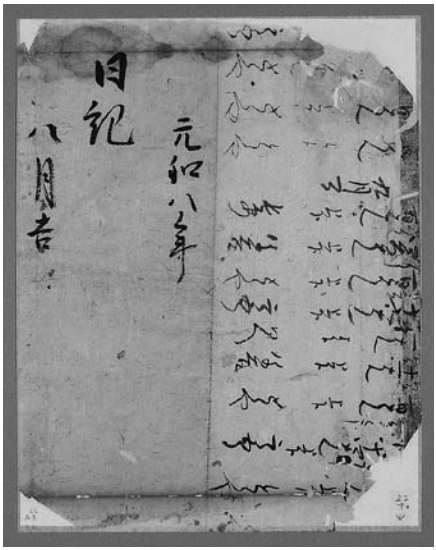
㉒ 大会

早大本の刷題簽下部に紅色の線刻模様。墨付き6丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ5行目「開きし」の「し」字、3丁オ3行目・4行目各行頭の句点、4丁オ2行目「吹あけて」の「吹」「け」字、5丁ウ5行目「騒き」の「き」字、6丁オ1行目「なせは。」の句点。両本の刷りの先後は不明。

表紙裏に封入の反故一枚に以下の文字がある（半折半段相当）。日付・番数・本屋の名前を記す。「六十四番上下」「百番上下」「十一番上下」「四百番上下」等とあるのは、冊数のことで曲目数ではあるまい。すべての番数の下に「上下」と

注記する。曲数を「番」で数えるものに謡曲と舞の本があるが、謡刊本で上下に分かれる編成は、江戸時代初期にはない。一番で上下二冊本の形態を取りうるのは、舞の本の方ではなかろうか。虎屋は、同時代の京の手猿楽と同名であり、虎屋に関わる刊行謡本が現存することが参照される。袋綴光悦本別製普通本の一種に「虎屋良有判之本」との箱書きを有する箱入りの本があり、また「虎屋正本」と称する刊者不明本が鴻山文庫に現存する（鴻山文庫謡本五5）。本文書の「とらや」も、良有自身かどうかは不明ながら、その一族ではあろう。二郎五郎・弥吉・長安についても不明だが、虎屋同様に版元であろう。本文書がこれらから本を仕入れた日計か、あるいは逆に本を卸した日計か、はっきりしないが、これが同一種類の書籍とすれば、複数の本屋から同じ本を仕入れる等のことは疑問であるので、これらの本屋にこの数の本を納品した記録と考えておく。いずれにせよ、もしもこれらが古活字版であったならば、かなりの部数を印刷していた様子が想像出来る。またこの日計表の半分に記された「日記」と題された「元和八年八月吉」の日付は、もとは袋綴の日記の表紙上面で、料紙のくすみ方の違いから見て、恐らくは日計の書かれた料紙を半折して日記の共表紙としたものを反故として、本冊の表紙の裏貼りに用いたのであろう。弥吉の四百番の肩に「八月」、百番〈八日〉の長安の次行に「九月一日」とあるのは、元和八年以前の記事なのであろう。



㉒大会：写真①

〈写真①〉 ］とらや／］□ん上下　　とらや／　］六十四（たし）はん上下　　二郎五郎／百（□日二□たし）はん上下　　とらや／　］□
十（日）一はん上下　　弥吉／　］一（□日）はん上下　　同人／　］十六（十□日）はん上下　　二郎五郎／百（廿三日）はん上下　　とらや／　］四（八）
百（月）はん上下　　弥吉／　］百（□八日）はん上下　　長安／九月一日／百はん上下　　とらや／百はん上下　　とらや／　］
□［　］□部也　　とらや／　］二郎五郎

上記の半折の残り半段分、九十度回転させた部分の中央上部に左記のごとし。

〈写真同〉 日　記（元和八年八月吉）

㉓ 当麻

墨付き10丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ1行目「ひら」の「ひ」字（⑤6丁ウ6行目と同活字か）、2丁オ6行目「ハきて超世」の「ハ」「超」字、3丁オ2行目「いつの世をまつ」の「の」「を」「ま」字、4丁ウ2行目「仏の」の「の」字、5丁オ5行目「曼荼羅と」の「と」字、6丁オ4行目「座禅円月の」の「の」字（4丁ウ2行目と同活字か）、7丁オ3行目「生身の」の「の」字、8丁ウ4行目「まのあたり」の「ま」字、9丁ウ2行目「ひかるゝ」の「ひ」字、10丁オ6行目「妙音の」の「能」字。

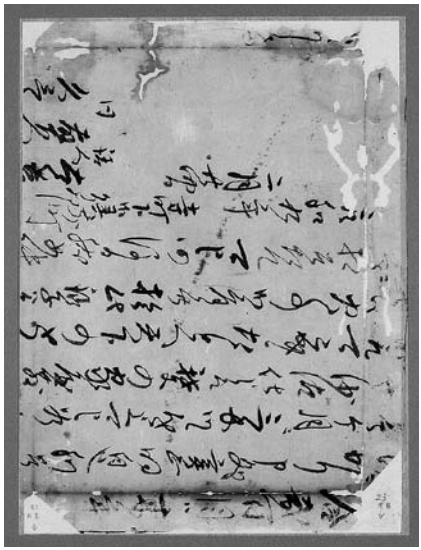
以下は天理本独自の欠損もしくはカスレの例。

7丁ウ7行目冒頭の「シテ上」の「シ」字、9丁オ5行目「盡虚空界」の「界」字、9丁ウ7行目冒頭の「シテ上」の「シ」字（7丁ウとは別活字）。

本冊は早大本の方が先印であろう。

表紙裏に封入の反故一枚に以下の文字がある。元和九年の年記は管見に入った反故の中では最も新しい。従って本

冊の製本は、それ以後ということになる。恐らく元和九年をかなり下った時期なのではなかろうか。借主の太兵衛は、能楽研究所が購入した本書の一部の内、〈阿漕〉冊の反故に「元和六年二月十二日／安兵衛／太兵衛殿まいる」、同じく〈安宅〉の冊の反故に「慶長十九年二月廿三日／新右馬助／太兵衛殿御やどまいる」「太ひやうへ殿／安兵衛」「太兵衛殿参」、〈江口〉冊の反故に「慶長十九年二月十日／新兵へ（花押）／大兵衛様／久作様／理□様／両三人参」（その他〈融〉〈鵜〉〈三輪〉の冊にも）等と見えており、これらの冊の製本を行った業者本人のことのようである。本文書からその住所が寺町下御霊前町（現京都市中京区寺町通丸太町下ル下御霊前町）であったことがわかる。やや乱雑な書きぶりなので、銀子の借用証文の控えかと思われるが、下部が欠損している署名三所はそれぞれ別筆のようであり、すでに返済が行われて戻って来た原本なのかも知れない。久三郎は⑫「鞍馬天狗」冊の写真④にも見える。同一人物であろう。



㉓当麻：写真①

〈写真①〉　」合弐百目ハ来年／　」切ニかり申処実正明白也利そ［　／　］壱个月ニ三匁ツ、進上可申候若□／無沙汰仕申候ハ、我等の家屋敷□／　」御取可被成候たとへ天下のとく／せい火事御座候共於此銀子ハ□／□□相そたて可申候仍後日状如件／元和九年　二月廿四日／寺町下御霊前町／かりぬし太兵□［　／請人藤左衛門［　／同　久三郎［　／　］□□ぬしさま／

㉔ 天鼓（てんこ）

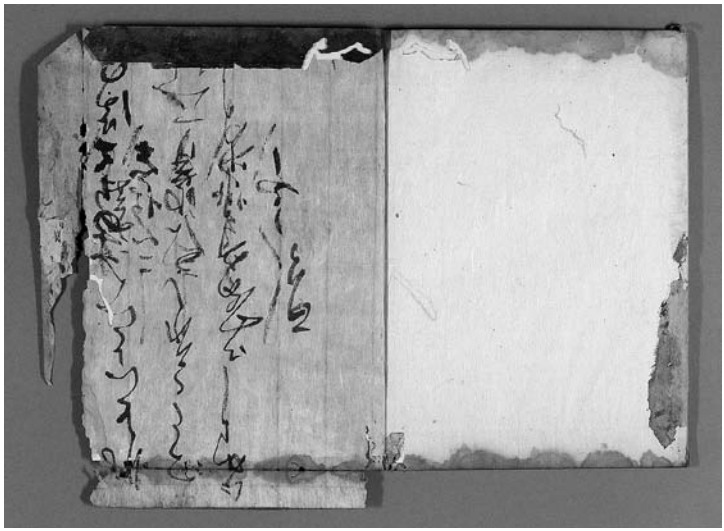
墨付き12丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

4丁ウ1行目「あるらん」の「る」字、5丁オ4行目「候へ」の「へ」字、7丁オ3行目行末「しほれそま」と4行目行頭「さる草衣」の間の行頭の句点の誤植、8丁ウ4行目「老人」の「人」字、9丁オ5行目「夕月の色」の「色」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁オ7行目「宣旨に」の「に」字、3丁ウ6行目「更に」の「更」字、4丁オ7行目「上カ、ル」の「上」字、6丁オ3行目「しらさる」の「類」字、8丁ウ2行目「跡をは」の「跡」字。天理本が先印と判断される。

裏表紙裏に4行分ほどの書状の断片（写真①②）があり、さらにその裏面にも五行分の文字（写真③）。写真①は原状、写真②はそれを解体して撮影したものだが、判読困難で意味不明。写真③は⑫「鞍馬天狗」冊の写真②と同様の類似曲趣の謡本五番綴の曲名のようである。㉖にも修羅能五番の曲名



㉔天鼓：写真①

を記した反故がある。能楽研究所購入分の〈藤戸〉の反故中にも「檜垣・班女・二人静・杜若・芭蕉」の曲名を記した文書が見える。

（書状分）〈写真①②（写真①は原状）〉風をハとハはこの条□役の□□□／　］人かた御座候なハ□可申一人も御か□□□／　］被成候よし御心斯候　恐々謹言／正月

（裏面分）〈写真③〉／はちの木　／しねんこし　／とうかんこし　／小袖そか　／しやう〳〵

㉔天鼓：写真②

㉔天鼓：写真③

㉕東岸居士

墨付き7丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ1行目「かやう」の「か」字、2丁オ5行目「これは」の「れ」字、3丁オ4行目「乱るゝ」の「る」

字、4丁オ5行目「来れ共」の「れ」字、6丁ウ6行目「さへつる」の「る」字、7丁ウ2行目「ものを」の「を」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

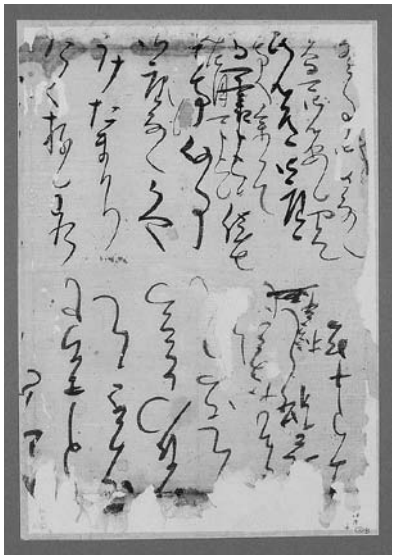
3丁オ2行目「ワキ」の「キ」字、7丁ウ3行目「一如なる」の「る」字。やはり本曲も天理本が先印であろう。

なお、4丁オ1行目「あらえる所の仏法のをもむき」、光悦特製本は「あらゆる所」、上製本は「あらえる所」、本学所蔵並製新種本は「あらえる所」、元和卯月本は「あらゆる所」で、古活字玉屋本は光悦本の過渡的な形態に同じである。4丁ウ3行目「鎮へ（トコシナエ）」は、光悦本諸本と同型、元和卯月本は仮名書き（とこしなへ）となる。

表紙裏に反故が二枚あり、以下のような文字が見える。発信人の「権平」の読みは存疑。能楽研究所所蔵の〈安宅〉冊の反故中にも左と同じく十一月十九日付の同人署名と思しき書状がある。

㉕東岸居士：写真①

㉕東岸居士：写真②



㉕東岸居士：写真③

（一枚目）〈写真③（①は現状）〉

なを〳〵事御さ□□之／かへ而可御心安候やかて／□方へ参候て／□御目可申上候／以上

ひんき御座候／而一書申上候然者／貴方何事／御座なく候や／うけたまハり／たく存候于今／□□□（以下欠）

／」□此□□［　／□事まち申候／御かき候て／八左衛門ところ／□て御やり候て候へ［　／　］□是たのミ

申候／恐々謹言　権平（花押）／十一月十九日

（二枚目第一段）〈写真②〉覚　太兵衛殿ニ預ケ／水かゝミ　弐部／かまた　六部／与一　壱部／たいしよくわ

ん　三部／あつもり　九部／らうゑい（きりとぢ）　弐部／あつもり　拾部／うつせミ　廿壱部／□いか□方　弐部

（同第二段）（同写真）」／ゆへ被申候アリ三部（水かゝミヲ）／三十部九郎右衛門へ右衛門尉／持行／二月廿三日

新右衛門尉（花押）／太兵衛殿御宿へ

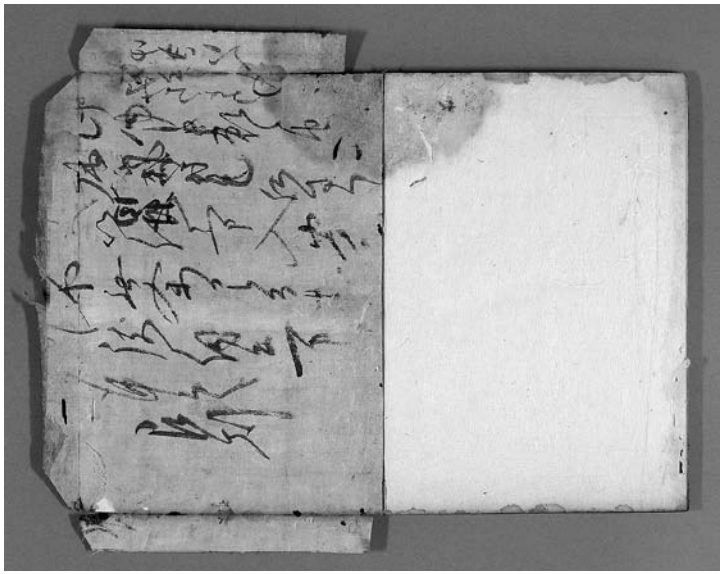
㉖ 道成寺

墨付き10丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁ウ1行目「あけ申て」の「け」字、2丁オ3行目「。〳〵」「けふり」字、3丁オ1行目「おほせら候（れ脱落）」の「ほ」字、同じく「申付候」の「候」字、4丁オ3行目「ひゝくらん」の「ひ」字、5丁オ4行目「申て」の「て」字、6丁オ5行目「彼客僧の」の「の」字、7丁オ3行目「。一念の」の行頭の句点、8丁オ1行目「あけうする」の「け」字、10丁オ1行目「深渕」の「渕」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

1丁オ3行目「此ほと」の「ほと」を手書きにより補筆、2丁オ5行目「着にけり」の「着」字を上書き補筆、5丁オ2行目「言語」の「語」字をなぞり書き補筆、7丁オ7行目「鐘は」の「盤」字、8丁オ6行目「大威徳」の「威徳」を補筆、同7行目「中



㉖道成寺：写真①

央」を貼り紙上書（下地は判読不能）。本曲も天理本が先印。

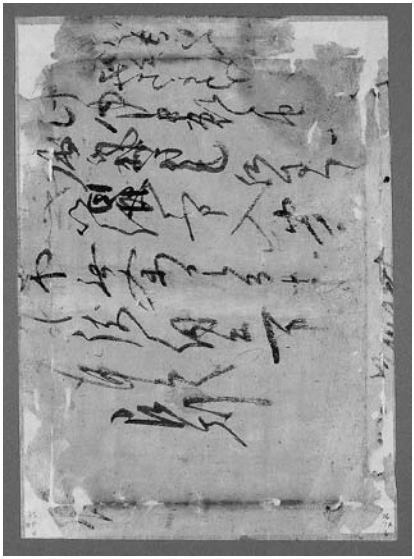
なお、本曲は、アイとワキツレの問答やアイセリフ、ワキセリフや物語など、一部の役注記の有無を除き、細部まで光悦本諸本に同じ。

裏表紙裏の反故両面に次のような文字が見える。

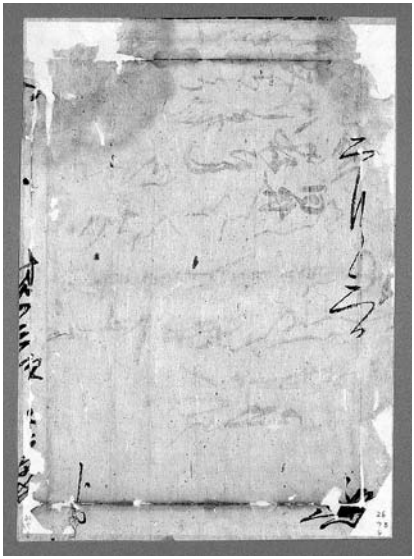
（一枚目表面の分）〈写真①②（①は原状）〉此中は煩之由［　／　］御気色何方へも／以後不申入客□／□や無余日候間□□／□候致伺公可申□□／謹言／即刻

（一枚目裏面の分）〈写真②を反転させて解読〉田村／かねひら／八しま／みちもり／ゆきいへ

（二枚目表面の分）〈写真③〉二月三日　（その他、紙端三ヵ所に「様」などの文字が見えるが判読不能）



㉖道成寺：写真②



㉖道成寺：写真③

㉗ 朝長

題簽上半分が欠損。「長」の下部のみ読める。天理本により補う。墨付き14丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ7行目「おもひ」の「お」「ひ」字、2丁オ5行目「穂に出す」の「に」字、3丁オ6行目「ましますそ」の「す」字、4丁オ4行目「主従の」の「の」字、5丁オ6行目「あらけなく」の「あ」字、6丁オ1行目「人」字、7丁ウ5行目「三世十方の」の「の」字、8丁オ7行目「せられ」の「せ」字、9丁ウ2行目「瑞諷」の「諷」字、10丁ウ4行目「時人を」の「人」字、11丁ウ1行目「よしひら」の「ひ」字、12丁ウ5行目「朝長か」の「長」字、13丁オ5行目「受る也」の「る」字、14丁オ2行目行頭の句点。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。本曲も天理本が先印であろう。

1丁オ6行目「急き」の「き」字、2丁ウ6行目「七日〳〵に」の「に」字、4丁ウ4行目「草の陰」の「草」字、5丁オ3行目「有様」の「有」字、7丁オ2行目「捨られ申」の「申」字。

㉘ 錦木（にしき木）

墨付き12丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ5行目「心とめし」の「と」字、2丁オ3行目「思はぬ人」の「人」字、3丁オ3行目「賣物哉」の「哉」字、4丁ウ2行目「胸」字の右上のスペース痕、5丁オ3行目「錦木細布の」の「錦」字、6丁オ2行目「物語」の「物」字、6丁ウ6行目「松桂に鳴」の「鳴」字、9丁ウ7行目「つゝり」の「つ」字、10丁ウ7行目「草の戸さし」の「の」字、11丁オ4行目「人しれぬ」の「人」字、12丁オ5行目「のうち」の「の」字。

以下は早大本独自のカスレの例。

10丁ウ3行目「懺悔」の「懺」字。

以下は天理本独自のカスレの例。

8丁ウ5行目「闇にまとひにき」の「ひ」以外の部分。

両例ともに刷りむらに過ぎず、刷りの先後を定めがたい。

㉙ 軒端梅（軒端の梅）

墨付き8丁。クセの部分に幸流系らしき鼓の粒付けを朱書。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁ウ7行目行頭の「シテ詞」の「テ詞」、2丁オ3行目「式部」の「式」字、同「候ひつれ」の「ひ」字、3丁オ4行目「作りもかへす」の「作」「も」「す」字、4丁ウ4行目「法の」の「の」字、5丁オ6行目「門の外」の「門」字、7丁オ1行目「賀茂」の「賀」字、8丁オ3行目「やハかくるゝ」の「ゝ」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

3丁ウ3行目「しれは」の「は」字、6丁ウ3行目「神明」の「明」字など。

いずれも刷りむらに上書きしてかえって不鮮明になったもので、天理本との刷りの先後を定める根拠とはならない。

㉚ 百万

墨付き9丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ6行目「つれ申」の「れ」文字、2丁オ1行目「シテ上」の「シテ」字、3丁ウ7行目「参せう」の「せ」字、4丁オ1行目「是なる」の「る」字、5丁オ1行目「うれしき人」の「人」字、6丁オ2行目「契の」の前の句点、7丁オ1行目「山城」の「山」字、8丁ウ4行目「袖なれや」の「や」字、9丁オ3行目「牟尼佛」の

「尼」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

8丁オ3行目「神力」の「力」字（カスレ）、同5行目「御法」の「法」字（欠損）、8丁ウ5行目行頭「上地」の「地」（欠損か）。

以下は天理本独自の欠損の例。

2丁オ7行目「三界のくひ」の「ひ」字（欠損）、4丁オ7行目「子といふ」の連結部と「ふ」字（欠損）、6丁ウ3行目「しら露の」の「露」字（雨冠の第2画が欠損）。

それぞれ同版の別丁に欠損活字を含むのは、製本の際に、同じ刷りの料紙を揃えていたわけではないことを示すものであろう。

㉛ 松風村雨

早大本は題簽剥落、「松風」と表紙左肩に打付書。曲名は天理本の題簽で補う。裏表紙裏打ちの左端下部に「林氏」と朱書。題記の文字と同筆らしい。墨付き14丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁ウ5行目「秋を残す」の「を」「残」字、3丁オ1行目「蜑人」の「人」字、4丁オ4行目「しほころもの」の「も」字、5丁オ7行目「シテ上」の「シ」字、6丁オ5行目「申候へし」の「遍」字、7丁オ2行目「世を捨人」の「人」字、8丁オ3行目「礒邊」の「邊」字、9丁オ3行目「二人共に」の「人」字、10丁オ1行目「松風村雨」の「松」字、12丁ウ6行目「別るゝ」の「る」字、13丁オ7行目「ッレ荒頼もしの　シテ御哥や」の「荒」「哥」字、14丁オ1行目「妄執の」の「執」字。

両本の一方のみの欠損は確認出来ず、刷りの先後を定めがたい。

なお12丁オ3行目の「三途河」は光悦特製本と同表記、光悦上製本・色替本・元和卯月本はいずれも「三瀬河」。これまでの上製本・色替本のみと共通する例と相反する。特定の揃本からの影響ではなく手元に様々の本があって、それを適宜に参照したものか。

㉜ 三井寺

裏表紙裏打ちの左端下部に「林氏」と朱書。墨付き13丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ3行目「ましてや」の「て」字、2丁オ3行目「あらたに」の「に」字、3丁オ4行目「ハらはまし」の「ま」字、4丁オ2行目「捨て」の「て」字、5丁オ3行目「故人」の「故」字、6丁オ5行目「かねをつく」の「を」字、7丁オ3行目「此後句」の「此」字、8丁オ3行目「ひゝきて」の「ひ」字、9丁オ2行目「春の夕くれ」の「の」字、10丁ウ1行目「これなる」の「る」字、11丁ウ1行目「ワキツレ」の「ワ」字、12丁オ7行目「子ゆへに」の

㉜三井寺：写真①

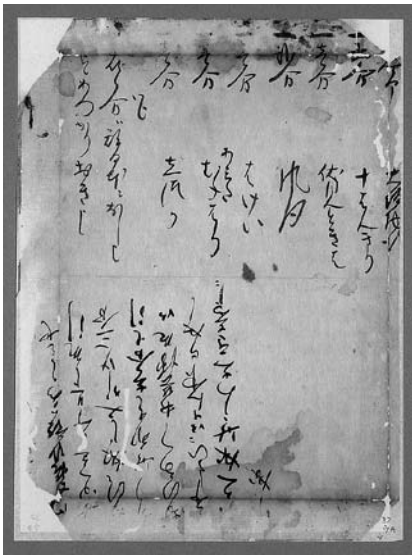
「へ」字、13丁オ1行目行頭「き」字。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレの例。

1丁オ2行目「かしこき」の「し」字、2丁オ6行目行頭「次第」、3丁ウ2行目「ありかほ」の「ほ」字。早大本が先印か。

なお3丁オ6行目、本来は「湖」とあるべき所を、早大本・天理本共に「潮」と誤植する。ちなみに光悦本諸本や元和卯月本は「湖」と正しい文字である。

また裏表紙裏張りの半折の折り目のある反故一枚に後記の文字がある。この中で「名代」の「算用」を行ったとされる安兵衛は、㉓に言及した、能楽研究所購入分〈阿漕〉〈安宅〉両冊封入の反故中の、太兵衛宛書状の差出人として見える。これも本替による精算結果の報告らしく、本替で生じた不足分の負債を安兵衛が立て替えたものであろう。



㉜三井寺：写真②

〈写真①②、①は原状写真〉

（料紙半折第一段分）」四部　大坂物語／一　六分　十はんきり／一　壱分　伏見ときは／一　弐分　風月／一　壱分　はけい／一　壱分　むねはり（あミた）／一　壱分　しつか／以上／右之分ハ替本ニなし申候／をあつかりおき申候

（半折第二段分）内五拾弐部ハ水かゝミ也／此ゆくゑ□可出申候故引／おひニ成申候又ほうけん二分／□り此

外は壱分も引／おひなく候安兵衛殿御／ミやうたひニ御さんやう被成申候／□かへ成此うつしきしやうニ／□成（以下文字なし）

㉝ **紅葉狩（紅葉かり）**

墨付き8丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ5行目「さひしき」の「ひ」字、2丁オ7行目「鹿の」の「の」字、3丁オ1行目「鹿の声」の「能」字、4丁オ2行目行頭「給ふ」の「給」字、5丁オ3行目「されは」の「れ」字、6丁オ7行目「契り」の「り」字、7丁オ1行目「月」字、8丁オ3行目行末「鬼神の」の「能」字。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁ウ7行目「さかしきに」の「さ」字、3丁オ2行目「いかに」の「に」字、5丁ウ7行目「竹のはの。」の句点（カスレか）。

なお、3丁オ7行目行末「懇に」とあるべき所、早大本・天理本共に「愍に」と誤植する。光悦本特製本は「ねんころに」、上製本は「ねむころに」、元和卯月本は「懇に」である。8丁オ4行目「火木」は恐らく「花木」の宛字であろうが、いかなる字を宛てるか定まらない難語。光悦本は本書に同じ、元和卯月本は「かほく」となる。

㉞ **矢立賀茂（やたてかも）**

墨付き10丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ2行目行末「明神」の「神」字、2丁オ1行目「秋程もなき」の全体、3丁オ3行目「室の明神」のほぼ全体、4丁オ4行目「此賀茂」の「此」「賀」字、5丁ウ7行目「名の」の「能」字、6丁オ2行目「同し江の」の「の」字、7丁オ2行目「頭の雪」の「の」字、8丁ウ2行目「君の」の「の」字、9丁オ3行目行頭「里」

字、10丁オ2行目「おさまる」の「ま」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁オ5行目「たのむ」の「む」字（ただし早大本は補筆で原態不明。補筆のない「の」との連結部も欠損）。5丁オ1行目「神社とかや」の「と」字（ただし早大本は補筆で天理本の当該箇所とは「と」の第1画の入筆角度が相違する。別活字の可能性もあるが、欠損部を別書体で上書きしてしまったのだろう。なお「と」字の上行ゴマ点も同活字だが早大本には欠損がある）。6丁オ1行目行頭の「〲」字、6丁ウ7行目「高根の深雪」の「深」字（カスレ）、7丁ウ3行目「今は」の「今」字の欠失部を補筆、同「汝」の「氵」（サンズイ）を補筆（いずれもカスレ）、9丁オ6行目「なつて」の「な」に補筆（カスレ）、10丁オ7行目「よちのほり」の「の」字（カスレ）。

早大本には刷りむらが多い上に、天理本に比して明らかな後印。

㉟ 山姥（山うば）

墨付き14丁。本文最終丁の裏の左端下部に、旧蔵者が「五世芝彦左衛門」と書き、その上から濃く「二条油小路」と墨書する。また表紙見返しや本文中の後シテ出の謡の前に、旧蔵者の謡い方注記あり。本文中にも墨書による節付や間拍子の直しあり。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ5行目「かやうに」の「か」文字、2丁ウ3行目「億土とかや」の「や」字、3丁ウ2行目「まいらする」の「す」文字、4丁オ6行目「此哥の」の「哥」字、5丁オ1行目「としころ」の「ろ」字、6丁オ3行目行頭「給へ」の「へ」字（前例と同活字）、7丁オ4行目「吹笛」の「吹」字、8丁ウ4行目行末「雪を」の「を」字、9丁オ3行目「おそろしき」の「き」字、10丁ウ2行目行頭「シテ上」の「上」字、11丁ウ2行目「雲水」の「水」字、12丁ウ3行目「人を」の「を」字、13丁オ6行目「一河の流。」の句点、14丁オ4行目「今まて」の「まて」

の連結部。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

2丁オ6行目・7行目の行頭部分「御急き」「御つき」の「急」「つ」字、11丁ウ7行目「色即是空」の「即」字、12丁ウ1行目行末「枝の」の「枝」字。

早大本の欠失箇所は、紙質の悪さの影響の可能性もあり、いずれの例もたんなるカスレかも知れない。従って刷りの先後を決しがたい。

なお7丁ウ2～3行目「林野に花を供する」の「林野」は光悦本と同型、元和卯月本は「深夜」（ジンヤ）と宛字。

㊱ 夕顔（夕かほ）

墨付き8丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ4行目「おもひ」の「お」「ひ」字、2丁オ3行目行頭「山のはの」の「能」字、3丁オ3行目「あふくなる」の「る」字、4丁オ4行目「河原院と」の「院」「と」字、5丁オ3行目「よすか」の「す」字、6丁オ1行目「秋の日」の「の」字、7丁オ6行目「しつくの」の「の」字、8丁オ2行目行頭「お僧の」の「乃」字。

以下は天理本独自の欠損の例。

6丁ウ3行目行頭「かきけす」の「か」字、6行目行頭「たえす」の「た」字。

早大本がわずかに先印であろう。

㊲ 養老

墨付き10丁。旧蔵者の節付等の朱直しが多くある。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ5行目「我君の」の「の」字、2丁オ3行目「たゝよひ」の「ひ」字、3丁オ1行目「親子の」の「の」

字、同4丁オ2行目「さなから」の「さ」字、5丁オ5行目「老をたに」の「に」字、6丁ウ4行目「さゝけん」の「々」字、7丁オ6行目「ひらけし」の「ひ」字、8丁オ6行目「瀧のひゝき」の「ひ」字、9丁オ6行目「音楽のひゝき」の「ひ」字、10丁オ4行目「かへりなん」の「へ」字。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレの例。

1丁ウ2行目「あまさかる」の「あ」字、2丁オ3行目「白頭の」の「の」字、3丁ウ2行目「養老」の「老」字など。

5丁オ2行目、早大本は「苔のかふ」とあるが、天理本は「苔のむす」とあり、天理本が正しい。すなわち早大本の誤植を天理本が訂正したものと判断される。さらに5丁オ4行目の「薬の水」の「水」字は早大本が行書体、天理本が草書体の別活字、5丁ウ5行目の「水ハよもつきし」の「水」字は逆に早大本が草体、天理本が行書体の別活字である。全体的に天理本には微細な欠損や刷りむらがある。誤植訂正から見ても本曲は天理本が後刷りであろう。

㊳ 吉野静

墨付き5丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ2行目「存せす候」の「候」字、2丁オ5行目「都の人と」の「の」「と」字、3丁オ2行目行末「はやせ」の「せ」字、同3行目「いきとをり」の「と」字、4丁オ7行目「こと〳〵く」の「く」字、5丁オ2行目「すゝむ人こそ」の「人」字、同行行末「しつや」の「や」字。

なお2丁ウ「きく時より都は先非をくひ」とあるが、上掛り諸本の同個所は「聞くより都は先非を悔い」とあるのが正しい。ただしこれは玉屋本の独自異文ではなく、演劇博物館蔵の光悦謡本袋綴別製特殊本と同蔵並製本甲種の、両本の〈吉野静〉によれば、両本共に玉屋本と同文の「。きく時／より都ハ先非をくひ。」とある。すなわちこれは

光悦普通本以来の異文を本書が踏襲したものである。なお演劇博物館蔵擬光悦本では「。聞より都ハせむひを／くゐ」の形。

㊴ 籠太鼓

墨付き9丁。下記の諸点の欠損やカスレ等で早大本は天理本と共通する。

1丁オ3行目「他郷のもの」の「郷」「の」字、2丁オ1行目「なきか」の「き」字への連続部、3丁ウ5行目「しら玉は」の「は」字、4丁オ1行目「以外狂気仕候」の「以」「外」字、5丁オ7行目「戸をひらき」の「ひ」字、6丁オ2行目「やさしき」の「や」字、7丁オ2行目行末「こん迄の」の「の」字、8丁オ2行目「獨り」の「り」字、9丁オ3行目行頭「かの國」の「能」字。

以下は早大本独自の欠損もしくはカスレの例。

6丁オ1行目行頭「のこりて」の「こ」に補筆の形跡あり、同7行目「さふらふそや」の「や」字に補筆の形跡あり。

以下は天理本独自の欠損もしくはカスレの例。

1丁オ4行目「科人」の「人」字、1丁ウ6行目「申付て」の「て」字。

右の例がいずれも欠損とすれば、本曲も丁ごとで刷りの先後を異にする料紙を一冊に綴じたものと考えられる。丁ごとに刷りの順番が前後する現象はこれまでにも若干認められたが、印刷済みの料紙の整序が行われていないことを示していよう。かなりの大部数を時に一部の活字の交換を行いながら一度に印刷し、各丁を製本職人の人数に応じて適宜に小分けして、それらを印刷順序を無視して組み合わせ、製本したために起こったとも考えられる。

二　まとめ―早大本から知られる古活字玉屋本の諸性格―

【天理本との関係】

早大本と天理本とは同版であることは明らかながら、冊により、刷りの前後は不定であり、㊴「籠太鼓」の冊で述べたように、丁ごとで刷りの前後が異なるらしい場合すらある。すなわち、両本は同時に印刷・発売されたものと考えられる。同一丁でも混在が見られる場合があるが、それらは欠損ではなく印刷ムラであろう。恐らくは製本に際し、刷りの前後には頓着無しに適宜に一冊に組み合わされ、またそれを適宜に百番程度の揃い本として編成したのであろう。㊲「養老」冊のように、早大本の誤植を天理本が校正した例が見受けられるが、逆に⑥「采女」冊のように、天理本の誤植を早大本が訂している例もある。また②「朝顔」冊と前述㊲「養老」冊には異植の部分が存在する。混在の例は精査すればもっと出て来る可能性があろう。おおむねは早大本の方に欠損もしくは印刷ムラによるカスレと思しき例が多く見られ、天理本には少ない。ただし双方で欠損の共通する例の方が遥かに多いので、両本は共に刷りとしては後の方の料紙なのかも知れない。ただし整版本のように、同じ版木で時を隔てて何度も印刷したわけではなく、古活字本の常として、初版を印刷したのみで解版していたであろうことは、両本の同一曲の異なる丁で刷りの前後が相違するという現象からも明らかである。したがって先印か後印かを云々することは、発売元を異にする整版本などの場合とは異なり、あまり意味のあることではあるまい。

【本書の刊行者】

早大本を初めとして諸所に分散所蔵される本書の反故の主が、太兵衛（たひょうえ）なる人物で、寺町下御霊前町（現京都市中京区寺町通丸太町下ル下御霊前町）であることが、早大本㉓「当麻」冊によって知られる。またこの太兵衛の姓は、

⑫「鞍馬天狗」冊に見える塩川であった可能性もある（ただし名字を名乗る身分だったかどうかは存疑）。仮に塩川太兵衛と呼ぶとして、この人物の仕事は何であったのかが問題になる。早大本の⑤「鵜飼」冊・⑥「采女」冊・⑭「実盛」冊・⑮「志賀」冊・⑳「殺生石」冊・㉜「三井寺」冊を初めとして、能楽研究所所蔵分などでも、太兵衛は他の書肆と思しき人物と本替による決済を行っていたことが明白であるが、本替をするには他書肆の出版物を受託販売すると共に、自らも刊行物を他書肆に委託していなければなるまい。④「海士」冊に見るように、製本の具材のみならず印刷用の消耗品らしき品々（胡粉・にかわ・刷毛）の支出の控えがあることも、太兵衛が出版そのものを業とし、自家において組版・刷り出し・製本・販売までを一貫して行っていたことが推察される。思うにこの古活字玉屋本の刊者は、（塩川）太兵衛なのではなかろうか。複数の反故に見える本替の控えの書目の、どれが太兵衛の刊行なのかははっきり判らない。これは文書が断片的に過ぎて、委託分の書目か預かり分の書目か、はっきりしないためである。全点の反故の調査が出来ればある程度まで明らかになるかも知れないが、小考の責を超える作業であるので、これは後考に俟ちたい。

【古活字玉屋本の性格】

古活字玉屋本は、通説の通り、光悦本謡本と元和卯月本の中間に位置するものであるが、本書の③「安達原」冊・⑫「鞍馬天狗」冊・⑭「実盛」冊・㉕「東岸居士」冊・㉖「道成寺」冊・㉝「紅葉狩」冊・㉟「山姥」冊・㊳「吉野静」冊の一部の異文からもそれは明らかである。とりわけ袋綴光悦本の影響が強い本のようである。ただし㉛「松風村雨」冊のように、光悦特製本のみと一致する異文の例もあるので、様々な版の光悦謡本が参照されているのであろう。すなわち本書は、観世大夫の校閲を経ていない、光悦本の雑多な版に基づく海賊版であり、謡本としての正統性には疑問なしとしない。その刊行時期は、㉓「当麻」冊に見える元和九年二月廿四日付太兵衛の借銭状断簡からは、

寛永年間に入ってからと考えられる。たんなる控えで原本ではなかったとしても、本替の算用状や借銭状は重要書類であったはずで、それが不要になったからこそ反故に用いられたのであろうからである。古活字玉屋本の覆刻である整版玉屋本刊行の下限は、寛永五年刊とされる『戊辰季秋刊玉屋本』（鴻山文庫蔵）であるので、古活字玉屋本の刊行はそれ以前ということになる。実はもっと下るような印象もあるのだが、一応右の鴻山文庫本を寛永五年とする『鴻山文庫本の研究』の説に従う。ともあれ元和卯月本が刊行された元和六年よりも三年以上後の本であるにも関わらず、版式や本文・節付において、元和卯月本に比して明らかに時代遅れの本が古活字玉屋本なのである。これも玉屋本の権威のなさ＝海賊版であるゆえんなのであろう。それでも売れるほどに、世間における謡愛好の風は、甚だしかったのであろう。

本報告執筆にあたり、野上記念法政大学能楽研究所に資料閲覧の便を賜った。記して御礼申し上げる。

（たけもと　みきお　文学学術院教授）